

あとがき (前著との違い)

最後まで読んでくださった皆さん、有り難うございました。

本書を読んでどんな感想をお持ちになりましたか？

それでは「はしがき」にも書いた通り、本書は前著『超・英文解釈マニュアル』からどのように変わったのか、最後まで読んでいただいた人には理解していただけたと思いますので、ここにくわしく説明しておきます。

変わった点 (主な改善点) は大きく分けると4つ。

1. 文法用語は使わない
2. 英文を「前半」と「後半」に分けた
3. “順番”を入れ替えた
4. パターンの追加

以下、順に説明していきます。

1. 文法用語は使わない

大学生に教えてみて、最初は、「主語」や「動詞、述語動詞」、あるいはSやVなど、通常の文法用語を用いて説明していたのですが、ある学生が「主語とか、文法用語が出てくるともうわからなくなる…」と授業後の感想に書いていました。そして、その学生は翌週から授業に来なくなってしまいました。

英語が超苦手な学生、英語にアレルギー反応がある学生を特に歓迎して受講生を募っており、そういう学生には、文法用語を使うだけで拒絶反応が起こることがわかってきました。

そこで3年目から文法用語はいっさい使わず、主語は「主人公」、動詞は「行動」として、「『主人公』は『行動』した」みたいな説明に変えました。

すると、「主人公はどれかな？」などと学生同士で話すなどして、かなりすんなりと授業の内容に入ってくれるようになり、満足度が一気に上昇したのです。このやり方でいこうと決めました。

これを踏まえて本書でも文法用語をいっさい知らなくても読めるようになっていきます。(ただ、読者の皆さんの習熟度はさまざまですので、適宜文法用語も添えたり、定義を明らかにして使ったりしています)

2. 英文を「前半」と「後半」に分けた (これが大きかった)

最初の1、2年目までは普通に「設計図」を使って教えていたのですが、わかってくれた反面、やはり、文の最後の方にある単語を「イントロ」の箱に入れたり、後半にある単語を「主語 (主人公)」の箱に入れる、という事例が続出しました。

「最初にあるからイントロだよ、最後にイントロはありえないよね」とか、鉄道と駅の絵を描いて、「鉄道では後ろに下がれないよね。いったん駅を通過したら後戻りできないよね」などと再三説明したにもかかわらず、やはり最後の試験になっても間違える学生が続出しました。

「イントロは使わなかった時点で×マークを記入しておこう」というのもこのような経験から生まれています。

しかし、それでもなかなか改善しません。そこで3年目に、**英語の文は実は「前半」と「後半」に明確に分かれている**、という話を最初にするにしました。

自分としてはなにげなく説明しただけなのですが、**この説明が今考えるとブレークスルーを起こすほど重要だった**と思います。

そして前半には「主人公は、行動した」と書いてある、つまり読む前から訳し方はわかっているので、その通り訳せばいいだけだと説明しました。文の前半を太字にして、「この太字が前半なので、この太字部分だけを設計図に入れてください」という言い方をすると、ほぼ全員が分類できるようになったのです。

考えてみると、英語は前半と後半に分かれている、と明確に書いてある英語の本や参考書はないですね。一番重要な英語の特徴だと思うのに...

4年目には、前半は「行動部分で終わる」というのも強調して教えたところ、分類だけでなく、訳も完璧にできるようになったのです。

英語は必ず「前半」と「後半」に分かれている、前半に何を書くか決まっている、ということを強調して教えるようになったことが、**2つ目の大きな改善点**だと思います。

後半部分を“断ち切った”ことで、私の言いたいことがより鮮明に伝わるようになりました。

3. “順番”を入れ替えた

前著では、文の左から順に「文の先頭→Sの直後→動詞→動詞の直後」と解説するスタイルでした。しかし実際に大学生相手に授業してみると、いろいろ問題が...

① 「どこから」～「どこまでか」という“切れ目”を明確に

「The ...で始まっていたら主語 (主人公)」というのは私の説明の代名詞のようになっているかと思いますが、予備校講師時代、ある学生が私のところに来て、「先生、すごいですね。そうだったのですか。The が主語なんですね、気づきませんでした」と言い出しました。

「The が主語」? 最初はふざけているのかと思いました。もちろん本当は、The ...というカタマリ、つまり「The と後ろの名詞とがセット」で主語なのです。

これは実は大学生相手に最初に説明したときも同じ反応があって、The だけを主語 (主人公) の箱に入れる学生がいました。あるいは、分類自体を書かない学生。主語 (主人公) の箱に何を入れたらいいかわからない様子。

そう、つまり The ...から主人公なのですが、「どこまで」が主人公なのかを明確に言わないと、主人公の箱に入れられないのだなと気づきました。

つまり、「ここから～」だけでなく「～ここまで」を明確にしないと**いけなかった**のですね。「どこまで」が**主人公なのか**という“切れ目”問題です。これは前著では、文頭12パターンについて解説した後に教えていたことです。

そこで、今までは「主人公の説明」に回していた「**of など前置詞...**」を「**The ... of ...**」パターンとして「**The ... / A ...**」とともに教えることにしました。

つまり、of など前置詞が出てきたら、その直前までを主人公の箱に入れてくださいと言ったのです。いわゆる「主人公の説明」が付くパターンですね。

そうすると正しく主人公の箱に入れることができるようになりました。

英語はこの「The ... of ...」パターンがすごく多いので、まずこれで自信を持ってもらおうと思ったわけです。

そしてもう一つ。主人公の説明が付かないパターンは主人公の後にすぐ行動部分が出てくるので、**行動部分 (動詞、V) のカタチも先に** (第2章 PART 1で) **教えることにしました**。be 動詞、一般動詞、受身の3タイプですね。これは前著ではかなり後ろの方で教えていたことです。つまり、行動部分特有のカタチが出てきたら、その直前までを主人公の箱に入れるように指導して練習すると、ちゃんとみんな主人公の箱に正しく分類できるようになったのです。

② 「文の後半の知識」が必要なものをあとに回す

そして文の先頭のサインについても、「When など“節”続詞」と「It」から始まる文は、あとから解説することにしました。

これも当初は前の方で解説していたのですが、いまいちピンとこないようでした。分類はできても訳はできません。

たしかにそうですよね。これらは文の“後半”の知識も若干必要となってきましたが、後半の話はしていないわけですから。

「When など“節”続詞」はイントロ部分が完全な“文”(正式には“節”)になっていますし、It から始まるパターンも後半の真の主人公が to V ... や that 節などなので文の後半の知識が必要です。

ということで、第2章の PART 1 は文の後半の知識が要らないものだけに特化することにしました。そして PART 2 の冒頭で、「文の後半の若干の知識」として最低限のことを話すことにしたのです。

- 文の後半の知識も必要なものをあとに回す
- PART 1 は前半の知識だけで読めるものに特化
- PART 2 の冒頭で「文の後半の若干の知識」(簡易版設計図)を解説

そして、To V ... パターンなど準動詞パターンの話をしてから、そのあとに、「It 始まり」の文の話をすることにしました。

そうすると、うそのように It 始まりの文が完璧に訳せるようになりました。

「It 始まりのパターン、もう完璧に訳せます。得意です」とコメントした学生もいました。

③ 「カンマ ... カンマ」パターンを先に

また、「主人公の説明」も、「カンマ ... カンマ」で囲む挿入のパターンを先に説明することにしました。主人公の肩書きなどですね。

これが一番簡単なパターンだからです。

これはわかりやすかったようで、みんな簡単にわかりました。

なおかつ、このパターンを教えてからだと、その後の who や that による主人公の説明も、「あの『カンマ ... カンマ』パターンが who や that に変わっただけだよ」と言うとうごく理解しやすいことに気づきました。

who や that のいわゆる関係代名詞パターンは英語の最難関と言われ、わからない人が続出するところですが、うごくすんなりと拍子抜けするくらい簡

単にわかってくれました。

というわけで主人公の説明も順番を入れ替えています。

4. パターンの追加

そして最後は、前著で説明できなかった Whether ... と Whatever など、疑問詞 ever で始まるパターンも追加したことです。

それほど出てきませんが、前著でこれだけ抜けていて、一応説明しておきたいなと思っていたので、文の先頭⑩の中で説明しています。

以上が前著との違いになります。

その他、前著は大学受験生を対象にしていますが、本書は大学生、社会人の方など一般の人たちにも幅広く読んでほしいと思って書きました。つまり対象が違うと言うことですね。

実用だけでなく、教養として楽しんで読んでいただいてもけっこうです。

*

前著『超・英文解釈マニュアル』と『超・英文解釈マニュアル2』は、おかげさまで多くの方に読んでいただきました。

本書はもちろん上に書いたように、すでに前著を読まれた方も楽しめるようにしていますので、ぜひ両方の本を手にとってみていただきたいと思います。

そして、どしどしこの本の感想や質問などをお寄せいただきたいです。

いずれ、この「前半読み」がマスターできる教室のようなものを開きたいと思っていますので、そのときの参考にしたいと思います。

本書を読んで皆さんの日常が少しでも変わったなら本望です。

かんべ やすひろ